

ティーチングポートフォリオ (健康栄養学専攻 健康医学研究室 中尾 真理)

1. 教育の責任

私は健康栄養学専攻および食物栄養学専攻の学生を対象に、以下の科目を担当しています。これらの科目は栄養専門家を目指す学生が人体の構造と機能、疾病の成り立ち、主要疾患の診断と治療について理解するための基礎となる重要な科目です。

家政学部家政学科健康栄養学専攻(四年制大学)

科目名	対象学年	開講時期	単位数	必修区分
解剖生理学Ⅰ	健専1年	後期	2単位	管理栄養士必修
解剖生理学Ⅱ	健専2年	前期	2単位	管理栄養士必修
病理学	健専2年	後期	2単位	管理栄養士必修
臨床医学概論Ⅰ	健専3年	前期	2単位	管理栄養士必修
臨床医学概論Ⅱ	健専3年	後期	2単位	管理栄養士必修
課題研究	健専3-4年	通年	6単位	選択

生活文化学科食物栄養学専攻(短期大学)

科目名	対象学年	開講時期	単位数	必修区分
病理学	食専2年	後期	2単位	栄養士必修

私は15年にわたりリハビリテーション科の専門医・指導医として臨床経験を積み、特に摂食嚥下障害のリハビリテーション加療に高い専門性を有しています。この豊富な臨床経験を活かし、患者に寄り添える管理栄養士・栄養士の育成を志して2023年4月に本学に着任しました。着任以来、すべての授業において摂食嚥下障害に関する実践的知識を教授し、時には臨床現場で活躍する専門家を講師として招聘することで、学生に刺激を与え、現場感覚を養う機会を提供しています。

各科目では講義を中心としながらも、パルスオキシメータを用いた酸素飽和度の測定、エピペンTMの模型を用いた実習、血圧測定、心音聴取など実践的なアクティブラーニングを取り入れています。さらに、課題研究においては、摂食嚥下障害に関連するテーマを中心に、学生が主体的に研究に

取り組むための指導を行っています。

2. 教育の理念

私の教育理念の中心は、「理論と実践の橋渡し」です。栄養学の専門家には、単に知識を暗記するだけでなく、その知識を実際の医療・健康現場で活用できる実践力が求められます。特に管理栄養士・栄養士の役割は、治療を要する患者の栄養管理から一次予防を中心とした健康増進・疾病予防まで多岐にわたってきています。

医療従事者となった管理栄養士が臨床現場で実践的な知識を持ち活躍できるよう育成することが私の使命だと考えています。15年のリハビリテーション科医師としての経験から、摂食嚥下障害を抱える患者と直接向き合ってきた実践知を学生に伝えることで、栄養ケアの現場でより効果的に貢献できる専門家を育てたいと願っています。

臨床現場で実践されている内容を、ライブ感を持って伝えることを重視し、実際の症例や最新の医療情報を取り入れることで、学生が将来の臨床現場をイメージしやすくなり、学習への動機づけにもなると信じています。また、臨床現場で活躍する専門家を講師として招き、現場の生の声を学生に届けることも大切にしています。

「手を動かして学んだことは忘れない」という信念のもと、血圧測定や心拍の聴取、エピペンTMの打ち方の実習などをアクティブラーニングとして積極的に取り入れています。2024年からは新たな試みとして、医療機関や高齢者施設等で実習する3年生に向けて救命救急講習を開講し、全員が一次救命処置とAED使用ができるようにする計画を進めています。

また、授業を理解し国家試験合格レベルまで到達するために、授業で利用するスライドを学生と共有し、毎回の授業内容を小テストとして問うことで、知識の定着を図っています。さらに、認定試験や国家試験の内容を小テストに取り入れることで、1年生の時から自然と国家試験を意識できるような授業展開を心がけています。

私は学生たちに、解剖生理学と病理学の知識を統合的に学び、人体の構造と機能、そしてその破綻によって生じる疾病を体系的に理解して欲しいと考えています。特に、医学の進歩が著しい現代において、最新の医学知識を持ちながらも、基本的な医学的視点から患者や対象者を捉える力を身につけることが重要だと信じています。

学生には将来、臨床現場で他職種と連携しながら、栄養学的な視点から健康管理や疾病予防に貢献できる専門家になって欲しいと願っています。

3. 教育の方法

私の教育方法は以下の4つの柱に基づいています：

a. 基礎知識の体系的な教授：

教科書に沿った講義を基本としながら、リハビリテーション科医師としての15年の経験から得た実践的な事例を紹介し、知識の定着と応用力の向上を図っています。特に解剖生理学と病理学の知識を関連付けて教えることで、生命現象とその破綻による疾病を統合的に理解できるよう工夫しています。さらに、摂食嚥下障害に関する最新の知見や臨床現場での実践例を豊富に取り入れ、学生の理解を深めています。

b. アクティブラーニングの導入：

パルスオキシメータを用いた酸素飽和度測定実習、エピペンTMの使用実習、血圧・脈拍測定、心音聴取実習など、実践的な技術を体験する機会を設けています。これにより、講義で学んだ知識を具体的に体験し、理解を深めることができます。「手を動かして学んだことは忘れない」という信念のもと、これらの実習を重視しています。

c. 国家試験を見据えた段階的学習：

授業内容と管理栄養士国家試験の出題傾向を関連付け、過去の出題例に言及することで、学生の学習意欲を高めるとともに、国家試験対策としても効果的な授業を展開しています。毎回の授業後に小テストを実施し、その中に認定試験や国家試験の問題を取り入れることで、1年生の時から自然と国家試験を意識できる環境を作っています。

d. 臨床現場との接続：

医療現場で実際に行われている診療や治療について、ライブ感を持って伝えることを心がけています。自身の臨床経験に加え、現役で活躍する専門家を講師として招聘し、学生に臨床現場の最前線を伝える機会を設けています。2024年からは新たに救命救急講習を導入し、医療機関や高齢者施設等で実習する3年生が一次救命処置とAED使用ができるよう実践的な訓練を行っています。

e. 研究マインドの育成 :

課題研究では、摂食嚥下障害に関連するテーマを中心に、学生が主体的に研究に取り組む姿勢を育てています。クリニカルクエスションの設定から研究設計、データ収集・分析、考察、そしてプレゼンテーションまでの一連のプロセスを通じて、エビデンスに基づいた思考力と問題解決能力を養成しています。

さらに、授業のスライドのみならず、毎回の授業のまとめも学生と共有し、復習や試験対策に活用できるようにしています。また、Google Classroom を活用した小テストやレポート課題を通じて、学生の理解度を確認するとともに、適切なフィードバックを行うことで継続的な学習を促しています。さらに、解剖学的構造や生理学的機能をわかりやすく伝えるために、動画資料も積極的に活用しています。

4. 教育の成果

これまでの教育実践により、以下のような成果が得られています：

a. 学生の理解度向上 :

授業内小テストの結果から、講義と実践的な実習を組み合わせた教育方法により、学生の理解度が向上していることが確認できています。特に解剖生理学と病理学に関連付けて学ぶことで、人体の構造と機能、そして疾病の成り立ちについての体系的な理解が深まっています。また、摂食嚥下障害に関する専門的知識について、学生からの質問や議論が活発になり、学習意欲の向上が見られます。

b. 実践力の養成 :

アクティブラーニングを通じて、学生が実際に医療機器や測定機器を扱う経験を積むことで、将来の臨床現場での活動に必要な実践力が養われています。特に嚥下障害に関する理解は、栄養指導の現場で直接役立つ知識として学生から高い評価を得ています。臨床現場で活躍する専門家による講義を通じて、学生の視野が広がり、将来のキャリアイメージが具体化してきています。

c. 国家試験対策としての効果 :

授業内容と国家試験の出題傾向に関連付けた講義により、学生の学習意欲が高まるとともに、国家試験対策としても効果を上げています。毎回の小テストによる知識の確認と定着が、国家試験

の合格率向上に寄与していると考えられます。

d. 緊急時対応能力の向上 :

救命救急講習の導入により、学生たちの緊急時対応能力が向上しています。この実践的なスキルは、臨床現場での実習時だけでなく、将来的な医療従事者としての自信にもつながっています。

e. 研究能力の向上 :

課題研究に取り組む学生の中には、摂食嚥下障害に関する研究テーマを選択する者が増え、国際的な基準である IDDSI(International Dysphagia Diet Standardisation Initiative)などに関する理解を深めています。研究活動を通じて、エビデンスに基づいた思考と実践の重要性を認識するようになっています。特筆すべきは、課題研究で取り組んだ摂食嚥下障害患者の栄養管理に関する研究が国際学会で高く評価され、学生表彰につながった例もあることです。このような成果は、学生の研究意欲を高めるとともに、国際的な視野を広げる契機となっています。

f. 学生からのフィードバック :

授業評価アンケートでは、「まとめがあってテスト勉強がやりやすい」「スライドがわかりやすく理解に役に立った」「授業に動画があることで理解しやすい」などの肯定的なコメントが多く見られます。特に、リハビリテーション科医師としての豊富な臨床経験に基づく講義内容に対する評価が高く、実践的な知識の伝達が効果的に行われていることが確認できています。

授業評価結果

授業名	回答数(回答率%)	開講時期	総合評価*
解剖生理学 I	41(89.1)	2023 年度後期	4.65
解剖生理学 II	37(90.2)	2024 年度前期	4.52
病理学(健専)	28(71.8)	2023 年度後期	4.46
病理学(食専)	29(96.7)	2023 年度後期	4.70
臨床医学概論 I	32(84.2)	2024 年度前期	4.59
臨床医学概論 II	36(92.3)	2023 年度後期	4.67

*1-5のリッカートスケールで回答

5. 今後の目標

今後の教育活動においては、以下の点を目標としています：

a. 救命救急講習の拡充：

大学・短大保健センターに所属する医療職スタッフの協力も得ながら、現在3年生を対象に実施している救命救急講習を、段階的に拡大し、健康栄養学専攻および食物栄養学専攻の全ての学生が卒業までに緊急時対応能力を身につけられるようにしたいと考えています。

b. デジタル教材の充実：

解剖学的構造や生理学的機能、病態生理をより視覚的に理解しやすくするため、動画や3Dモデルなどのデジタル教材を充実させたいと考えています。特に摂食嚥下のメカニズムや障害のプロセスを視覚的に理解できる教材の開発に力を入れたいと思います。

c. 多職種連携への理解促進：

学生が多職種の現場で活躍する専門家と対話・面会する機会を提供し、チーム医療における管理栄養士・栄養士の役割をより深く理解できるようにしたいと考えています。摂食嚥下リハビリテーションに携わる言語聴覚士、看護師、医師などの専門家との交流を通じて、多職種連携の重要性を実感できる場を設けます。

d. 個別学習支援の強化：

学生の理解度に応じた個別の学習支援を強化し、特に基礎学力に課題のある学生へのサポート体制を整えたいと考えています。オフィスアワーの活用を促進し、学生が気軽に質問や相談ができる環境を整備します。

e. 国家試験対策の体系化：

1年次から段階的に国家試験を意識した学習ができるよう、科目間の連携を強化し、体系的な国家試験対策プログラムを構築したいと考えています。特に、摂食嚥下障害に関連する出題内容について、より効果的な学習方法を開発します。

f. 摂食嚥下障害に関する研究の推進：

課題研究において、国際的な嚥下調整食の標準的基準(IDDSI)に関する研究や、摂食嚥下障害患者家族の介護負担と精神的健康に関する研究などを推進し、学生の研究活動を通じて社

会貢献できる成果を生み出していきたいと考えています。さらに、国際学会での発表機会を積極的に提供し、学生の研究が国際的に評価される機会を増やしたいと思います。

g. 地域・産学連携の強化 :

地域において摂食嚥下障害を持つ患者やその家族を支援するための取り組みに学生が参加できる機会を創出したいと考えています。また、食品メーカーと協働しての嚥下調整食品の評価および開発プロジェクトに学生が参画できる機会を設け、産学連携を通じた実践的な学びと社会貢献の場を提供します。

これらの目標に向けて、常に自己研鑽を続けるとともに、学生からのフィードバックを大切に、教育の質の向上に努めていきます。リハビリテーション科医師としての臨床経験を最大限に活かしながら、次世代の栄養専門家の育成に貢献していきたいと考えています。